

初年次教育学会第 10 回大会（2017.9.6-7）

ワークショップ・ラウンドテーブルの概要

1. ワークショップ（WS1～WS7）

WS1 モデル授業公開検討会（3）：ノートの取り方 第二弾

藤田哲也（法政大学）

中川華林（法政大学大学院）

本ワークショップでは、担当者（藤田）が実際に模擬授業を行い、授業後に参加者の皆様と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をする。2016 年度に続き、今回も「ノートの取り方」を取り上げる。「ノートの取り方」は、単なるスタディスキルの一つというより、学生が「大学では自主的・自律的に学ぶ必要がある」ということを頭で理解しているだけの状態から脱却し、「実際の行動に反映させるべきである」という「気づき」を得るための絶好のテーマである。「ノートの取り方」をマニュアル的に教えるのではなく、初年次教育の意義に気づいてもらえるような工夫を取り入れることが肝要である。本ワークショップでは前半は藤田による模擬授業を行う。その際には「授業内模擬授業（中川が担当予定）」を含め、学生が「ノートの取り方を自分で工夫する必要がある」という「気づき」を得るための工夫を実演する。2016 年度は「教科書中心」と「板書中心」の授業を題材として取り上げたが、今回は板書中心の授業に代わり「パワポのスライド中心の授業」を取り上げる。ワークショップ後半では、学生にとっての真に有効なアドバイスについて、参加者の皆様と討論する予定である。参加者の皆様には、前半は学生の視点で授業を受けていただきたく、原則遅刻せずに参加するようお願いしたい。後半の冒頭では、指定討論者（中川）から提示される、授業をよりよくするため論点について全参加者で意見交換をした後、自由な質疑応答も行う予定である。

keyword： 初年次教育モデル授業，授業検討会，気づき，シラバス

WS2 レポートの基本を学ぶ授業 — アクティブラーニングによる展開 —

井下千以子（桜美林大学）

大学で求められるレポートの基本とは何かを理解することを通して「自分で考えて書ける」と学生が実感できる授業をいかにして提供できるか、ともに考えていきましょう。指導のツールとなる、基本フォーマット・見本レポート・自己点検評価シート・ワークシートをどう使いこなし、授業を展開していくのかを解説します。さらに、調べた資料をどう整理し論理を組み立てていくのか、そ

のプロセスをいかに主体的に学ばせるのかを体験していただきます。スマホ、タブレット、PC などインターネットに接続できる機器をご持参ください。

予め、井下千以子(2017)『思考を鍛える大学での学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』の第3章を読み、P.119のWork10の[宿題]「小学生のケータイ・スマホの利用実態と問題」に関する情報を1~2点調べてきていただくと、ワークショップの内容を深めることができます。

先着40名とします。宿題は必須ではありませんが、宿題をしてきた方を優先しますので、ご理解の程よろしくお願いたします。また、6月11日の大学教育学会のポストワークショップに参加した方は同様の内容となりますので今回はご遠慮ください。

Keyword： アカデミック・ライティング、アクティブラーニング、論理的思考、批判的思考

WS3 学生の経験を言語化し、学びを深めるライティング指導 —TAE (Thinking At the Edge) をベースにした 「経験をことば化する方法」—

成田秀夫 (河合塾)

山本啓一 (北陸大学)

得丸智子 (開智国際大学)

アクティブラーニングが広がり、学生が発信する機会が増えているが、情報を検索して「再発信」するだけに陥ってはいないだろうか。真に発信の「主体」として、学生自身の経験に根ざした思考の発信を促すべきだろう。

このような問題意識のもと、私たちの研究グループは、経験から得た知恵(身体知、暗黙知)をことばで表現する方法(「経験のことば化」と呼ぶ)を模索してきた。今回は、哲学者ジェンドリンが創始し、得丸(2008 他)が表現活動としてデザインした TAE (Thinking At the Edge) をベースに、初年次教育で実施可能な「経験をことば化する方法」を紹介する。この特徴を要約すると、次のようになる。

- 内省を促し、思考力と表現力を一体のものとして高める
- 経験を相対化し意味づける文章表現へと、段階的・系統的にプロセスをデザインする
- 他者との共有や、アカデミック・ライティングへの接続に開かれている

本ワークショップでは、時間が許す限り、「記憶の断片を小カードに書き取り広げて俯瞰する(データ化) →小カードを類似性によりグループにする(グループ化) →グループ内類似性、グループ間関連性を短く表現する(パターン化) →キーワードを選定し主張の核心を論理的に表現する(構造化)」という一連の手順を体験してもらいたいと考えている。

keyword： TAE、経験の言語化、アカデミック・ライティング

WS4 協同学習に活かす相互評価：学習者と共につくるルーブリック

関田一彦（創価大学）

アクティブラーニングとして注目される協同学習において、その評価に関する質問は多い。このワークショップでは、協同学習の特長を生かした評価のためのルーブリックづくりについて、私が現在試行中の取組みを参加者と共有したい。

ルーブリックは教師が学生の学習到達度を評定する道具ともなるが、学生相互に自分たちの取組みを点検し合う際の道具にも使える。特に、アクティブラーニングで期待される自己評価能力の向上を意図した授業づくりに際し、ルーブリックを使った学生たちの相互評価活動は、その目的に向かって有益と考える。

ワークショップでは、協同学習に活かす相互評価について短めの講義を行う。その途中で、参加者には、自分たちの学習活動に関する評価ルーブリックを作成していただき、講義の終わりにそれらを使った相互評価を体験してもらおう。限られた時間での試行であり、十分な体験学習の機会となるかどうかかわからないが、ルーブリックを他の参加者（学習者）と共に作る体験を通じて、多少とも「評定のための評価」から「成長のための評価」へ、評価活動のイメージが変わる機会になれば幸いである。

keyword： 協同学習、ルーブリック、相互評価

WS5 2030年の初年次教育では何が起こりうるか

田中 岳（東京工業大学）

立石慎治（国立教育政策研究所）

大きな関心を寄せていた「2018年」が眼前です。志願者（入学者）減という現実が、再び減少を始める18歳人口で切実さを増し、2030年には100万人を切ることが見込まれています。2019年度からは「専門職大学」と「専門職短期大学」の創設が見通され、2020年度実施の2021年入試は新たな大学入試のスタートです。

では、2030年度の初年次教育は一体どのようなもののでしょうか。大学間のサバイバル競争を保留し、2030年の初年次教育を大学関係者として考えようとするのが、本ワークショップのねらいです。

とはいえ、2030年を想像することは簡単ではありません。起こり得る状況（可能性）の吟味がスタート地点になるでしょう。2030年に起こりうる将来像を検討することで、現在を再考する試みです。このプロセスを通じて、現在の初年次教育を動かしている「ドライビング・フォース」をあぶり出し、願望や確信でもない2030年への一歩を見出すことを目指します。自身の考える（考

えてきた) 初年次教育へのアプローチを捉え直してみたい方の参画をお待ちしています。

[目標] ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語るができるようになる。[役割] 担当者は会場の相互作用を活性する進行に努めますので、参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。[過程] ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体での共有までを計画しています。

keyword： 2030年、組織化（アプローチ）、シナリオプランニング、人口減少社会

WS6 協同学習の効果を高める演劇的手法の導入

青柳達也（佐賀大学）

角 和博（佐賀大学）

安永 悟（久留米大学）

学習者が、個人やグループで演劇的空間と時間を創造するためには、学校教育などでそれまでに学んできたさまざまな知識や技能、リテラシーやコンピテンシーを総動員する必要がある。それだけに、教科ごとに分かれた、分断された知ではなく、実社会で活かされる確かな学びが展開する。一方、教師が学習者を指導する際、演劇的な手法を取り入れることにより、いままで以上に学習者の活動性を高めることができる。例えば、ラウンドロビンを指導するときにある演劇的な手法を考慮して指導し、それを学習者に意識させながら活動させると、学習効果が高められる。

2時間のワークショップでは、アイスブレイキングから始めて、身体表現の様々な技法のもつ非言語コミュニケーションの効果を感じて、いくつかのワークのあとに感想、意見、質問などのフィードバックの時間を共有する。

その後、協同学習のある技法でグループワークを行っているなかで、ある演劇的手法を行うことで協同学習の効果を高める演劇的手法の導入を体験する。

keyword： 身体表現、非言語コミュニケーション、相手を感じる力、インプロビゼーション、パフォーマンス・ラーニング

WS7 ポジティブ心理学を取り入れた初年次教育を考える

長山恵子（金沢工業大学）

松本かおり（金沢工業大学）

教員は授業を通して学生達が生き生きと学業に励むための様々な働きかけを行っている。その働きかけは、授業内容の充実、アクティブラーニングなどの授業運営方法等多岐にわたる。その中で、

本ワークショップでは、すでに海外において教育分野への適用例が増えているポジティブ心理学を授業に取り込むことで、学生のウェルビーイング（心身ともに健康な生き方）とレジリエンス（立ち直る力+立ち向かう力）を高め、学生生活を充実させるとともに、学習成果へつなげる試みについて、金沢工業大学における事例も交えて考えてみたい。

具体的には、まずポジティブ心理学の考え方、適用事例などを紹介する。そしてその中で重要な要素である「ポジティブ感情」、「強み」、「建設的な人間関係」については、その場で演習を実施することで理解を深めていく。最後に、参加者が実際に担当している授業や日常の学生との会話の中に、それらの要素をどう生かすことができるかについて考えてもらい、お互いに紹介し合い、意見交換をする時間も取りたいと考えている。その後、参加者からの自由な質疑応答も行う予定である。

なお、本ワークショップの内容は、初年次の学生に対して活用できるだけでなく、教員間や教職員間の関係にも応用できるため、いろいろな立場の方々に参加いただきたい。

keyword： ポジティブ心理学、ポジティブ感情とネガティブ感情、自分の強みを知る、
他者との良い関係を作る

2. ラウンドテーブル (RT1~RT4)

RT1 初年次教育における職員の役割について — 職員主体と教職協働 第5報 —

企画者： 藤本元啓 (崇城大学)
司会者： 藤本元啓 (崇城大学)
話題提供者： 出口良太 (中部大学)
池ヶ谷浩二郎 (創価大学)

大会参加者の目的のひとつに、初年次教育実例情報の収集がある。今回は中部大学から「導入教育としての新入生恵那研修～職員の視点から～」、創価大学から「総合学習支援センター(SPACE)で展開する初年次へのアプローチ」と題して、職員が正課課外授業に参画する事例を話題として提供いただいた。これらをもとに参加者の所属大学における初年次学生に対する支援体制の実例や課題等について、成功・失敗事例や運営等の課題・悩みを語り合い、本音の意見交換を行いたい。

RT2 初年次教育と発達障がい学生支援

企画者：西村秀雄 (金沢工業大学)
司会者：沖 清豪 (早稲田大学)
話題提供者：西村秀雄 (金沢工業大学)
沖 清豪 (早稲田大学)

学生の多様化とそれに伴う学生支援の多様化が進捗する中で、初年次教育を担当する教職員は新しく対応困難な複数の課題に直面している。その中でも発達障がいを抱える学生の大学への適応については、当事者である学生自身だけでなく、彼らの周囲にいる学生や初年次教育を担当する教職員にとっても、何をどのように考え、対応すればよいかについて模索が続いている。特に教育改革としてアクティブ・ラーニングを求める大学改革の文脈では、組織としても教職員個々人にとっても、支援の在り方を問い直される状況にある。

あるいはまた、2016年4月における差別解消法の施行によって、「合理的配慮」をめぐる支援の捉え方について、学内外の関係者同士でもずれが生じる状況が生じている。

すでに教育学関連諸学会や学生支援・相談をめぐる学会・研究会では、障がい学生支援全体、あるいは発達障がい学生の支援に関する研究報告、シンポジウムや研修会が開催されている。初年次教育学会でも昨今の研究報告などで、事例紹介などを通じて関連する内容のものが散見されるようになった。

こうした流れを受けて今年度の大会では、初年次教育の文脈における障がい学生支援、とりわけ発達障害を抱える学生への支援の在り方について、現状と課題を共有するラウンドテーブルを設定

することとした。担当する2名は当該領域の専門研究者ではないが、それぞれの授業実践や研究活動を通じて本問題への迅速な対応や情報共有が必要であると認識している。情報提供は最低限にして、ラウンドテーブルとして参加者の声を集める取り組みを行ってみたい。

参加される会員の皆様には、ぜひご自身の職場での課題あるいは対応方法についてメモなどを作成してきていただき、誰もが一言ずつ発言するラウンドテーブルにできれば幸いである。参加者それぞれの現場での課題を持ち寄り、意見交換や対応方策の紹介などを通じて、新たな視点を獲得し、現在の試行錯誤の状況を整理し、次の段階に立ち向かえる多少の元気をもってもらえる会となるよう努めたい。

ご参加を検討される方は、ぜひ自分の職場での課題・対応策事例を箇条書きなどの簡単なメモにして持参していただきますようお願いいたします。

RT3 初年次教育において思考力を育成するための授業づくり

企画者：小林祐也（関西大学大学院）

司会者：小林祐也（関西大学大学院）

話題提供者：佐伯 勇（甲南女子大学）

小林祐也（関西大学大学院）

本来、大学は、ゼミナール（以下「ゼミ」）を通して思考力の育成の場を有していたはずである。そこで、大学の教師は、学問に関連したテーマについて学生に議論させ、多くの視点から考えさせる。しかし、これらの教育が「タコつぼ型」とか「社会で役に立たない」等の言葉で批判を受けるなかで、「実学」や「キャリア形成」といった新たなキーワードによって改革の必要性がでてくるようになった。

実学についていうと、大学も、社会のニーズという大義名分の下で教育学部、看護学部、薬学部といった学部を新設して「就職に強い」という特徴を表に出した。この特徴をふまえて、高校生も大学を選ぶ傾向が強くなっている。そして、入学後の学生は、学問的知識の学びに多くの意味を見出さず、「就職で役に立つ」知識の習得に関心をもつようになった。

以上の問題を解決する方策として、課題解決型学習（Project-Based-Learning）を思い浮かべる大学の教師がいるかもしれない。確かに、この学習を通して、学生は、個々の学習に適した方法論を習得し確立するなかで設定した具体的な課題を解決するなかで主体性を育成できるだろう。しかし、学生に友達関係にある人にもクリティカルなコメントをしたり意見を述べる能力や、今問題になっていることを認識でき関心をもつ力を習得していることが前提となる。しかし、多くの大学で、この能力を問題解決型学習の前に予め習得している学生は非常に少ない。他方で、教師は、授業における学生の学びの状況よりも、15コマの授業計画を達成することで手一杯になっているという問題を抱えている。

このような学生の特徴をふまえると、彼らの思考力の育成は、学生の主体性に任せるだけでは不十分である。初年次の多くの学生は、大学入学までに「物事を筋道立てて考える」能力を習得できておらず、学問的知識や専門家の主張などを根拠とすることなく、思いつきや他者の考えをそのま

ま鶴呑みにするといった形で自分の考えを構築することが多い。したがって、このためには、学生の思考を支援するための教師の教育的介入が必要になる。

本ラウンドテーブルでは、大学教師が実際に行える思考力の指導を模索するなかで、どのような授業づくりをすれば効果が得られるかについて、フロアの大学教師の現実的な視点に立って議論を展開する場としたい。

具体的には、まずは①企画者によるラウンドテーブルの目的を説明し、②現在のキャリア教育の限界とプロジェクト学習の視点から思考力の育成について佐伯勇氏にご議論いただく。次に、企画者から、③学生実際に使えるようになるための思考指導の方法を検討する、それらを踏まえ⑤フロアと忌憚のない質疑応答を行う、という流れで進めていきたい。

RT4 初年次授業における TA,SA 等の役割 — 何を求め、どのように育成するか —

企画者：大西直之（中部大学）

司会者：大西直之（中部大学）

話題提供者：秦 喜美恵（立命館アジア太平洋大学）

松尾智晶（京都産業大学）

正課の授業内で上級生が受講者を支援する仕組みには、TA, SA, LA, 学生ファシリテータなど様々な呼称がある。求められる役割にも広がりがあるが、より上級学年・専門領域における授業と、低学年での導入や大学への定着を目的とする授業ではその役割が明らかに異なっているといえよう。

本ラウンドテーブルでは大学初年次における正課の授業、中でも、いわゆる初年次ゼミなど大学教育そのものへの接続・導入を目的とする科目において、TA,SAなどの「上級生サポーター」に特にどのような役割が求められるのか、そのようなサポーター学生をどのように育成するのかという視点から、2つの先進的な取組事例を紹介いただく。

それらをもとに、ピア・サポートの重要な意義である「支援する学生自身の成長」をどのように導いていくか、また、授業外・正課外における様々な学生支援にどうつなげていくか、といった課題についても考えながら、参加者と共に意見交換を行っていきたい。